

5. 今月のトピックス 「トマト灰色かび病について」

◆被害の様子◆

灰色かび病は寄生範囲が広く、非常に多くの植物で発生します。野菜類においても、トマトやナス、イチゴ、キュウリ、レタスなどで発生し、本県では特にトマトにおける重要病害です。

本菌は傷口や枯死した部分から侵入しやすく、主に果実や花弁、葉などで発生して灰色のかびを生じます(図 1a、b)。病勢が激しいと株全体が枯死することもあります。また、果実の場合、かびが発生しなくても果実表面に黄白色の円形小斑点(ゴーストスポット)を生じることがあります(図 1c)。

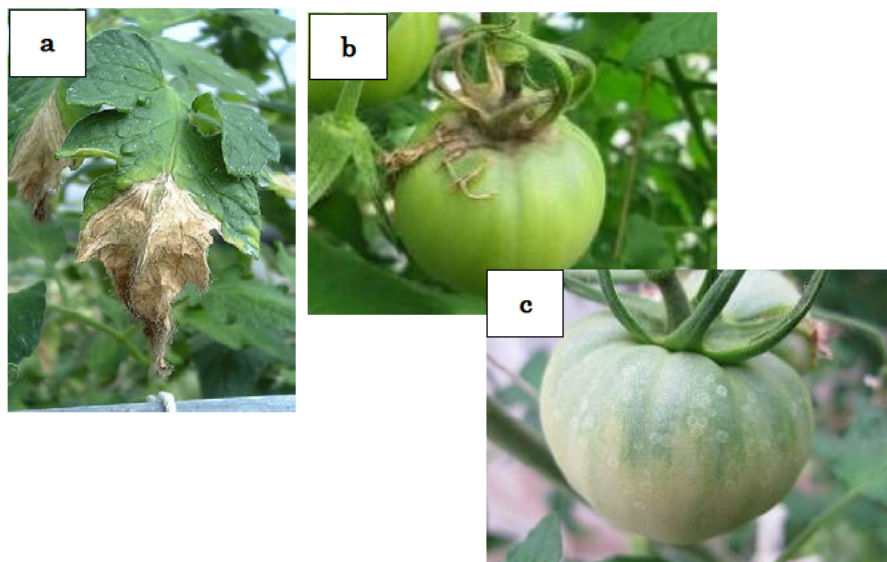


図 1 被害葉および被害果の様子 (農業研究所 鈴木啓史氏原図)

◆今年の発生状況◆

今年は 2 月下旬～3 月上旬に曇雨天の日が多く、日照不足でハウス内の湿度が上昇したこと、気温が平年より高めに推移したことなどが影響し、発生が

増加しました(図 2)。例年、4～5 月(春先)に発生が多くなりますので、今後も引き続き注意が必要です。

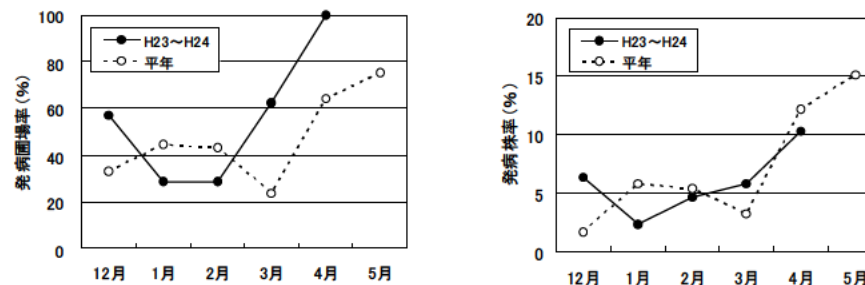


図 2 県内のトマト灰色かび病発生状況の推移(巡回調査結果)

※各圃場 50 株を調査。平年は過去 10 年間の平均値。

◆薬剤耐性菌について◆

本病は薬剤耐性菌が発生しやすい病害です。三重県では、毎年春先に現地圃場における薬剤耐性菌の発生状況を調べています。県内のトマト産地では、すでにジカルボキシミド系薬剤やベンズイミダゾール系薬剤に対して、耐性を示す菌株が確認されています。

薬剤耐性菌の発生状況は、地域あるいは圃場によって異なりますので、その懸念がある場合には、普及センターなどの指導機関に相談してください。

◆防除のポイント◆

- 1) 栽培管理: 本病は、20℃前後の気温と多湿条件で発生しやすいため、ハウス内の温度に注意し、湿度管理に努めてください。
- 2) 圃場衛生: 発病した茎葉や果実、枯死葉などは伝染源となります。圃場をよく観察し、こまめに取り除いて圃場外に持ち出し、適切に処分してください。
- 3) 薬剤防除: 発病前の予防防除が基本です。また、薬剤耐性菌が生じやすいため、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。